

Courrier de Séverac

セヴラック通信



第9号

2010
後期

日本セヴラック協会・会報

Société Déodat de Séverac - JAPON

2010年12月5日(日)
衍芸館

《例会》

15:00-16:40

【演奏】

深尾由美子 (Pf)

セヴラック：華麗なるワルツ《ペパーミント・ジェット》

Déodat de Séverac : Valse brillante de concert "Pippermint-git"

【演奏とお話】

末吉保雄

セヴラック：歌劇《風車の心》について その4

森朱美 (S) ・ 鎌田直純 (Bar) ・ 末吉保雄 (Pf)

セヴラック：歌劇《風車の心》第1幕第4場より

Déodat de Séverac : Extrait de "Le coeur du Moulin" Acte 1, Scène 4, Poème de M. Magare

～休憩～

【演奏】

平原あゆみ (Pf)

ヴィラ=ロボス：《赤ちゃんの一族》第1集〈赤ちゃんの家族〉より

Heitor Villa-Lobos : A Próle do Bêbé No.1

1. 陶器の人形 Branquinha / 2. 紙の人形 Moreninha
3. 粘土の人形 Caboclinha / 5. 木の人形 Negrinha
6. ぼろきれの人形 A Pobresinha / 7. 道化人形 O Polichinello

館野 泉 (Pf)

末吉保雄：《いっぱいの子どもたち》左手のためのピアノ小前奏曲集

Yasuo Sueyoshi : "Plein d'enfants" 6 préludes brèves pour piano m.g.

1. 雪とけて La neige fondant... / 2. 学校へ en route pour l'école
3. えかき歌 dessiner en chantant / 4. 遅くなった帰り Il est tard, rentrer vite...
5. 一輪車 monocycle / 6. 太郎を眠らせ... berceuse

《懇親会》

17:00～

セヴラック通信
Courrier de Séverac

第9号
2010
後期

目次

歌劇《風車の心》について (3) ●末吉保雄	4
NEWS 舘野泉さん、サン=フェリクス=ロラゲの名誉町民に！	7
〈連載〉セヴラックと私●窪田葉子	10
第14回例会の報告●鎌田和夫	14
第13回例会プログラム 表2	
編集後記	14

オペラ 歌劇《風車の心》について (3)

第14回例会のお話より

末吉保雄

このオペラ《風車の心》の演奏は、全曲の隅々がわかっていないまま、楽譜を見ながら少しずつ進めて楽しんでいます。音源が今までは簡単に手に入らなかったのですが、「セヴラック通信」(第8号)にCD発売のニュースがあります。前回、前々回と聞いていただいた演奏の読みと解釈と、ずいぶんずれていると困るなあ、と思っておりますが……(笑)。

この連続演奏の前々回(第1回)は、主人公であるジャックが歌う〈ジャックの歌〉から始めました。そして前回(第2回)は長く留守をしていたジャックが、生まれ故郷に戻ってきて、久しぶりに見る自分の故郷の懐かしさを歌う場面を演奏しました。ジャックは、恋人マリーといっしょになれるようにお金をためるために村を出て行きます。しかしその不在はじつに長かったために、マリーは留守の間にピエールという男と結婚してしまいます。そこにジャックが帰ってくるという噂が伝わってきて、マリーの心が不安に揺れ動きます。そういうことをまったく知らないジャックは、マリーのことをただ思い続け、故郷のさまざまな葡萄畑や教会の塔や、畑の広がりや、遠くに見えるピレネーの山を見ながら、久しぶりに帰ってきた感慨にうたれているわけです。すると道の向こうのほうからマリーがやってくる場所が見えてくる。ジャックはひじょうに心が高ぶって、かつてあれだけ愛し今も思い続けていたマリーを、大きい声で「マリー、マリー」と呼ぶところで、前回は終わりました。

今日はその部分をだぶらせて、呼びかけるところから聴いていただきます(中略)。オペラの構成は全部で2幕の仕立てになっていまして、第1幕が7場からできています。今日はヴォーカルスコアに、「ジャックとマリー」と書いてあるところから始めます。その歌が終わると第4場に入りますので、これまでの演奏を合わせると第3場を聞いていただいたこととなります(中略)。

◆ライトモチーフ

《風車の心》はこの時代のオペラのひとつの傾向として、ライトモチーフ、つまり音楽のいろいろなテーマが、「不運」だとか「昔の子供時代の思い出」といった事柄に対応しています。この物語の中ではフクロウが重要な役割を担い、賢くて昔の哲学者のように知恵をもっている、とされていますので、「示唆を与えるフクロウ」のテーマというものもあります。今日これから歌う場面では、ジャックのマリーにたいする愛を、フクロウの鳴き声がいつそうかきたてることとなります。またオペラの最後の場面でジャックは、村はずれで鳴くフクロウによって、自分がここにはいけないということを悟るわけです。

もうひとつ重要なのは、「アンジェラスの鐘」です。第3場では「ジャックが村を出て行ったときにちょうど教会でアンジェラスの鐘が鳴っていた」とマリーが歌いますが、セヴラックはその場面でアンジェラスの鐘を鳴らします。曲中には、この他いろいろモチーフが散らしてあって、セヴラックの他の作品——歌曲やピアノ曲、あるいは、セヴラックがドビュッシーに傾倒していた時期の作品なので、ドビュッシーもまたよく吸収されていて、その反映が出てきます。ドビュッシーに詳しい方なら、ピアノ曲のあの部分、歌曲のあそこの部分を思い浮かべることでしょう。

◆アンジェラスの鐘と祈り

セヴラック協会のメンバーは2007年に、セヴラックの誕生日7月20日に館野さんが私の曲《土の歌・風の声》も弾いてくださる、ということもあって、セヴラックの故郷の町サン＝フェリクス＝ロラゲに行ってきました。そこの風土とオペラの舞台が重なっていることは前回お話ししたとおりで、そっくりだと思います。セヴラックのオペラには、少年の郷土での強い体験が反映しています。ヨーロッパでは、教会の鐘や鐘楼がどこにもあって、日常生活では鐘がひじょうに大きな役割をします。現代化された今日のフランスでも、まだ地方の生活は教会中心の暦で毎日が動いています。そして教会で鳴らされる鐘は、意識するしないにかかわらず、村人や町の人たちの記憶やイメージの中にしみこんでいます。それはこの地方出身の音楽家——たとえばフォーレや、あるいはフォーレに影響を受けたドビュッシーもそうですが、しばしば教会から聞こえてくる鐘の音に大きな役割を与えています。

アンジェラスの鐘は、リストの作品にも出てきます。ローマ・カトリックでは、マリア様が受胎告知を受けたことに感謝するために、毎日マリア様へ祈りを捧げます。朝、昼、晩と時間が決まっています。時が来た——アンジェルス・ドミニ Angelus Domini とラテン語では言うそうですが、エンジェルというのは神のお使い、天使という意味です。マリア様が神様のお使いを受けたことの感謝の祈りをする。そのときに朝、昼、晩に鐘を鳴らす。昼というのは正午です。日本の昔の寺の鐘の音も同様ですが、その鐘を聞くと正午が来たことを知ります。

オペラの中では、ジャックとマリーが歌い「あのときは取り入れの時期だった」「そうだ秋だった」とお互い言い交わす直前にアンジェラスの鐘が鳴り出します（譜例）。

するとマリーが「そうアンジェラスの鐘が鳴っていた」と歌います。このリズム自体は音楽の大きな流れの中では、ほとんど無関係に出てきます。このリズムと響きが出てきたら、アンジェラスの鐘が鳴っているのだ、とと思ってください。

アンジェラスの鐘はマリア様への祈りです。そしてマリーの心の中で、アンジェラスの祈りが、彼女自身の祈りに通じていきます。ただ「鐘が鳴った」というのとは相当違うわけです。マリーは深い葛藤のなかにいます。まさにその葛藤はこれから高まろうとしている。ジャックは帰ってきた。しかし自分はすでに夫がいる。会っている間にふたりは昔の

譜例 アンジェラスの鐘

Plus lent

M. - yais en - ten - dre chan - ter les clo - ches aux é -

Plus lent

Ped. *pp* a peine *

M. - chos si ten - dres... Doux Ange - lus des beaux di - man - ches en - vo -

Ped. * Ped. *

Très lent

(Elle veut prendre Jacques dans ses bras mais celui - ci se recule) JACQUES

M. - és!

Ped. *rit.* *rit.*

愛を思い出し、マリーの心はすっかりジャックを思う自分の気持ちを取り戻していく。「ふたりの愛はいつのことだったのだろう」と思うときに、アンジェラスの鐘が鳴っていた……。

やがてこのアンジェラスの鐘は、物語の要所で鳴ります。その点を注意していただくと、立体感が出てくるように思います。

(談)

NEWS

●館野泉さん、セヴラックの生地サン=フェリクス=ロラゲの名誉町民に！

当協会顧問の館野泉さんに、セヴラックの生地サン=フェリクス=ロラゲから、名誉町民の称号が授与されました。館野さんにお話をうかがいました。

(メダルを渡されたのは) 7月20日、セヴラックの誕生日のコンサートの時。事前にそんなことは何も知らされていませんでした。

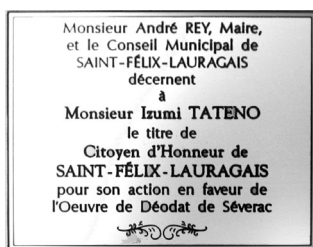
演奏が終わると、ジャン=ジャック・クバイネさんが「ちょっと待って」といって、急にステージに上がってきて、挨拶をしました。

「館野さんは19歳のときからセヴラックに興味を抱いて、ずっとセヴラックの音楽を弾き続けてきました。この音楽祭のことを知ってから、10年近く毎年来てくれて、演奏してくれました。また日本にもセヴラックやこの音楽祭のことを紹介し続けてきました。その功績を称え、感謝の念をこめて、賞をお渡ししようと思います」。

そしてサン=フェリクス=ロラゲの町長さんもステージに上がってきて、このメダルを渡してくれたのです。続いてカトリーヌ・ブラック・ベレール夫人がセヴラックの楽譜(歌曲《梟》の手稿譜)をくれました」。

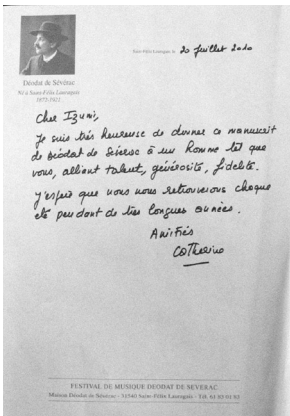
この授与式のことは、演奏会が終わるまでまったく知らされていなかったもので、驚きましたし、とてもうれしかった。私の演奏生活50周年記念のツアーを日本でやることを知っていたので、そのお祝いでもあった、と思います。

(談)



サン=フェリクス=ロラゲのアンドル・レ町長と町会は、館野泉氏に、デオダ・ド・セヴラックの作品のための活動に対してサン=フェリクス=ロラゲの名誉町民の称号を授与する。





フランスのセヴラック協会の手紙



歌曲《梟》手稿譜
1ページ

歌曲《梟》 手稿譜

2 ページ

Handwritten musical score for page 2 of the song 'The Owl'. The score is written on six systems of staves. Each system consists of a vocal line (treble clef) and a piano accompaniment (bass clef). The lyrics are written below the vocal line. The music is in a key with one sharp (F#) and a common time signature (C). The lyrics include: 'e han - te me canco - eu - que - si pro - stet de re -', 'cul o - lei - que tu te - me - conspi - tu de', 'vot - tem ut - te - sedem ipe - eu - que - si', 'pau - ce ce - min - de - que - que - de - tu - melle - et de - melle', and 'mest - e - me - de - me - de - que - si - se'.

Handwritten musical score for page 3 of the song 'The Owl'. The score is written on six systems of staves. Each system consists of a vocal line (treble clef) and a piano accompaniment (bass clef). The lyrics are written below the vocal line. The music is in a key with one sharp (F#) and a common time signature (C). The lyrics include: 'por te tu - fons - te - que - ment - da - me - me - ce - que - si - de -', 'ce - que - si - me - me - ce - que - si - de -', 'ce - que - si - me - me - ce - que - si - de -', 'ce - que - si - me - me - ce - que - si - de -', and 'ce - que - si - me - me - ce - que - si - de -'.

歌曲《梟》 手稿譜

3 ページ



セヴラックと私

窪田葉子

そのころわたしは、楽譜編集の仕事をしていました。新たにつくられる現代作品の出版以外にはなかなか積極的な意味を見出しにくい領域でしたが、たとえ知られつくした作品でも切り口を変えた編集をすることで「音楽する人」たちに貢献できれば、という思いで企画を考える日々でした。

館野先生との出会いはそんな日々のなかに偶然ありました。12年前のことです。

当時、国内版では全曲の出版がされていなかったグリーグ『抒情小曲集』の楽譜をつくろうと、解説の執筆者を探していたとき、ほとんど「ダメもと」の気分で連絡を入れてみたのが館野先生宅のファックスでした。演奏旅行で世界中を飛び回られている超多忙なピアノ界のビッグネーム。しかも競合する別の出版社からすでに多くの楽譜を出している……。「ダメもと」には根拠がありました。

それから数週間後のこと、出版の期限が迫ってなかば諦めかけていたところに長期不在の詫びで始まる快諾のファックスが届きました。おもえばその1通の返信が、今日につながる館野先生との不思議で得がたい関わりのスタートでした。

先生と初めてセヴラックの話をしたのはそれからさらに数年後のことでした。監修と解説をお願いした都合3冊の楽譜の出版を終えて、そのお礼や新たな企画の展望などについて電話で雑談をしていたときのことです。

おそらく演奏旅行の合間の短い在京のときだったのでしょう。一方のわたしは会社のデスクでふつうに勤務中でした。差し迫った用件でなかったためか、何に急かされることもなく、近況などをくつろいでお話しさせていただいていました。

そのときでした。話の流れのなかでわたしがふと口にした「セヴラックとかも、いいですよ」という、ごく軽い発言をとらえて、「えっ！ あなたもセヴラックがお好きなんですか？」という先生の即時の応答。

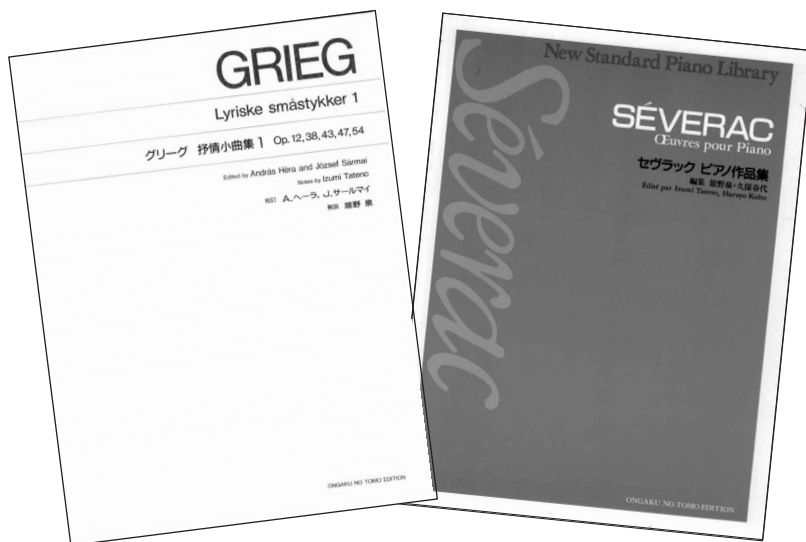
逆にわたしのほうが驚いたほど、それは、見えない電話の向こうのお顔が瞬時にほころんだことを想像させる、明るい同調の声でした。

そのころセヴラックといえば、容易に入手できる資料はチョコリーニの3枚組CDくらいでした。こと音楽について珍しいものの好きのわたしは、それを何かのきっかけ

——それが何だったかは残念なことに忘れてしまいましたが——で入手し、折にふれ聴き返していたという程度でしたが、わたしのなかで無意識ながらきつと〈好きな作曲家〉の項目に分類されていて、とっさのその軽い発言になったのだと思います。

先生のセヴラックへの熱い思いはほどなく CD 録音や楽譜出版、そして 2003 年 5 月の本会設立へとつながっていきますが、あのファックスと、電話中のなにげない一言がなかったら、この稀有な会の誕生に立ち会うことも、こうして毎回の楽しく親密な〈音楽の時〉に参加する幸せもなかったでしょう。それどころか、いまだに会の存在すら知らなかったかもしれません。

初めて聴いたときでさえ、どこか懐かしい感じのするセヴラックの音楽。その温かい気質のなかに、すでに「〈出会い〉と〈再会〉の場所」が用意されていたのかもしれない。



第14回例会の報告

鎌田和夫

東横線の代官山からJRの荻窪へ。地下一階から地上二階へ。新たな会場は開放された窓の明るく、そこから望まれる新緑の若葉が6月の風を爽やかに運んでいました。やわらかな光りが射し込み、淡い影の移ろいの漂い流れ、うっとりした思いにさせてくれます。木の温もりの優しさの所為でしょうか、会場は団欒のような温かな空気に包まれ、檜の湯船に浸かっているような心地よさに浸れるのでした。そんな安らぎを覚えつつも、どこか一抹の淋しさが、ふっと過ぎったのも事実でした。

すっかり例会の場所が様変わりしてしまい、どことなく落ち着かぬ思いでいたのは僕だけではなかったようです。やはり慣れ親しんだ環境がガラリ変わってしまうと、ひどく違和感を覚え、幼子のような戸惑いを禁じ得ませんでした。

しかし、そんな思いは東の間のことでありました。3回目となる歌劇《風車の心》の素敵な演奏が始まろうとしていたからです。末吉先生の前口上に耳傾けていましたら、サン＝フェリクス＝ロラゲの丘陵が眼前に広がっていたのです。前回ではバリトンの鎌田さんが独り淋しく切なげに「マリー」と叫んでいましたが、今回は違いました。間近にマリー役の森朱美さんが美しく華やかに歌い上げ、ジャック役の鎌田さんの嘆きの歌と重なり合い、田園の豊かな広がり遊ぶ草花が香り高く漂って来るようでありましたから。美しい緑の風景の中に二人の艶やかで悲しげな姿が浮かび上がり、まさに歌劇を堪能している至福の時をもらいました。

休憩の後は久保春代さんのピアノでセヴラック《セルダーニャ》より〈村のヴァイオリン弾きと落穂拾いの女たち〉、〈リヴィアのキリスト十字架像の前のラバ引きたち〉の2曲が続けて演奏されました。明るく、澁刺と響きわたり、晴れ渡った乾いた空気の中を愉快地散歩している想いで聴いていられたのです。バルビゾン派のミレーの絵模様が浮かび上がりましたが、2曲目は少し重たい気分襲われてゆきました。ちょっとメランコリーな思いを引きずっていたら、それぞれに詩が生まれました。

村のヴァイオリン弾きと
落穂拾いの女たち

麦秋 鎌田和夫

(一)
連なる丘の
草原に
黄金織りなす
麦秋の
広がる海の
輝きよ

(二)
さわやかに
たわむれる
六月の
そよ風よ
哀しみの
ヴィオロンの
透明に
淋しさを
包みゆき

風に穂波の
騒ぐ声
落穂拾いの
女たち
遅しく揺れ
影の揺れ
光りの中に
薫り満ち

むら雲を
赤く染め
夕暮れの
静止する
寂寞の
漂えば
迫る闇
咽んでた

リヴィアの十字架像の前の
ラバ引きたち

道しるべ 鎌田和夫

(一)
重き心を
引きずれば
丘から丘へ
鐘の音の
光りの滴
こぼれゆき
心に染みる
温もりよ

(二)
教会の
鐘の音よ
ラバ曳の
鈴の音よ
草原に
舞い響き
交差する
別れ道
行く先の
定まらず

風に流離う
安息に
傷の癒され
天空の
広き海原
青き道

薄暗き
坂道を
刑場へ
口笛を
吹きながら
彼の人と
昇り逝く

そして、フィナーレを飾ったのは館野先生のピアノによる末吉先生の《土の歌・風の声》。
呟くように奏でられ、また一味違った南フランスの大地の香りが漂って来るのでした。そ
れの小さな詩。

呟き 鎌田和夫

哀しみの
呟きの
土の歌
淋しきの
風の声
喜びの
囁きの
空の歌
おかしみの
囁きの
鳥の声

呟きの
鐘の歌
囁きの
鐘の声
さすらいて
こだまして

NEWS

●平原あゆみさんのソロリサイタル

当協会会員の平原あゆみさんが、2006年以來5年ぶりのリサイタルを開きます。《セルダーニャ》全曲を演奏予定。楽しみです。

平原あゆみピアノリサイタル

2011年5月23日 オペラシティリサイタルホール

セヴラックの《セルダーニャ》、ムソルグスキー《展覧会の絵》

編集後記

◆会社のPCがMacからWindowsに変わることになり、編集方法の変更を余儀なくされそうです。折よく次は第10号！（時の速さを感じます）。次号から全面刷新予定です。

◆会員の方の演奏会情報を会報に載せたいと思います。

掲載ご希望の方は、severac.japon@gmail.comまでメールにてお知らせください。

セヴラック通信 第9号 2010 後期 日本セヴラック協会 会報

2010年12月5日発行

発行：日本セヴラック協会

<http://www.geocities.jp/severacjp/index.html>

E-Mail: severac.japon@gmail.com

名誉会長◎カトリーヌ・ブラック・ベレール

顧問◎館野泉、濱田滋郎、末吉保雄、小沼純一

事務局◎伊東美香、亀田正俊、窪田葉子、松田純子

事務局：松田純子◎〒247-0013 横浜市栄区上郷町 262-32-5-204 TEL & FAX: 045-895-2317

連絡先：亀田正俊◎ TEL&FAX: 042-502-7227 / E-Mail: kameyan@jcom.home.ne.jp

印刷・製本：フェデックス・キンコーズ・ジャパン



日本セヴラック協会
Société Déodat de Séverac - Japon